

学内広報

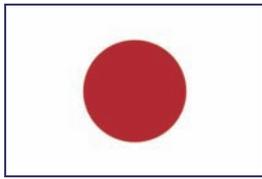
for communication across the UT



特集：Todai Forum 2009 in the UK

2009.6.19

No. 1387



Todaiフォーラムとは？

東京大学は、国外の著名な大学・研究機関において、本学の優れた研究成果を発表するとともに、相手方大学等との研究交流を通じて本学の国際的プレゼンスを高めることを目的として、平成12年(2000年)よりTodaiフォーラム(第1回～6回まではUTフォーラムという名称で開催したが、第7回目の今回から、名称をTodaiフォーラムに変更)を開催している。

program フォーラム【総合文化】

	Human Security and Business(人間の安全保障とビジネス) 会場:シティユニバーシティ・ロンドン
4月27日(月)	参加者:【東大側】山影進、佐藤安信、山下晋司、遠藤貢、旭英昭、柴宜弘、石田勇治、藤原帰一、中山幹康、鎗目雅、山本哲史、Haeng-ja Chung【英国側】Malcolm Gillies, Richard Gillingwater, Meharnaz Mostafavi, Stephen Castles, Roger Zetter, Barry Rider, Malcolm MacIntosh, Paul Palmer, Chizu Nakajima, Alan Hunter【招待者】高須幸雄(国連大使)、雨宮清(山梨日立建機)、来栖薫子(大阪大学)
28日(火)	学生フォーラム

特集

Todai Forum 2009 in the

UK

4月27日(月)～30日(木)、第7回Todaiフォーラムが英国にて開催されました。今回は、シティユニバーシティ・ロンドン、インペリアルカレッジ・ロンドン、ケンブリッジ大学、マンチェスター・メトロポリタン大学において行われた、各フォーラムについて報告します。

program フォーラム【経済】

	Disability and Economy(障害と経済) 会場:マンチェスター・メトロポリタン大学
4月29日(水)、30日(木)	参加者:【東大側】松井彰彦、福島智、澤田康幸、長瀬修、星加良司、飯野由里子、関口洋平、川島聡、河村真千子、西倉実季、瀬山紀子、臼井久実子、坂原樹麗、佐藤崇【英国側】Colin Barnes, Lucy Burke, Darren Chadwick, Paul Duckett, Juliet Goldbart, Dan Goodley, Carolyn Kagan, Rebecca Lawthom, Tom Shakespeare
	学生フォーラム

概要と報告

Human Security and Business @シティユニバーシティ・ロンドン

グローバル化の進む今日の世界が直面する「人間の安全保障」という課題について、ビジネスという新たな視点を加味した研究成果を世に問うことができた。「人間の安全保障」という課題は、従来のような国家に主導された国際社会の中では正当とされつつも危険な状態にある人々の安全確保に注目するものであり、新たなパラダイム構築を必須とする課題である。しかしこの課題が必然的に持続可能性を求めるものである一方で、人間生活や社会において強力かつ必要不可欠な要素であるビジネスとの関わりを論じる研究は、これまで十分には行われてこなかった。この点に着目し、フォーラムにおいてはその理論的検討を試みるとともに、実際に「人間の安全保障」に関わるビジネスを展開する企業や、そうした活動に非営利の立場から関わるNGOら市民社会の取り組みを周知することを試みた。

「人間の安全保障」とビジネスの関わりを、(1)紛争、(2)人の移動、および(3)ガバナンスという3つの面から検討するためにそれぞれに対応するパネルセッションを設け、それら多角的分析を通じて得られた知見と、そこから見えてくる次なる各論的課題について明らかにした。学生フォーラムでは、教員フォーラムにおける3つのパネルセッションの枠組みに加えて、CSR(企業の社会的責任)という第4のパネルを追加し、さらに細分的に「人間の安全保障」とビジネスについて活発な議論を展開し、活発な議論が展開された。

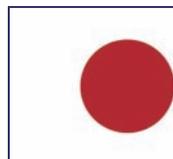
概要と報告

Disability and Economy @マンチェスター・メトロポリタン大学

著名な障害学研究者を擁するマンチェスター・メトロポリタン大学において、東京大学で行われている、日本はもとより世界で唯一の障害学と経済学の学際研究の成果を、障害学の発祥の地であるイギリスで紹介し、東大の学術研究水準の高さを積極的にアピールするとともに、障害者を含めたすべての人々にとって住みやすい社会づくりに向けた新しい構想を探るため、日英研究者の対話をいっそう深め、学術の国際交流を進展させることを目的として行われた障害学と経済学の代表的な研究者が、それぞれの研究成果を基にした講演を行い、討論会で学際的議論を深めた。このフォーラムは、国際的な公開シンポジウムとしては世界で初めて、障害学と経済学の本格的な学術交流が行われる場となった。

従来、障害学と経済学の研究者間での学際的対話は世界的にほぼ皆無であった。そのような対話を世界で唯一、ここ数年築いてきた東大経済学研究科READ(学術創成研究費による障害と経済のプロジェクト)の研究成果は、障害学発祥の地・英国で高く評価された。この東大フォーラムを緒として、今後は東大経済学研究科を中心に、障害学と経済学の学際研究が世界規模で広がり、深まっていくものと思われる。学生フォーラムは、3名の障害をもつ学生を含め、参加した学生10名全員が報告を行うという形で積極的に参加し、交流を実現した。また、一般参加者の学生セッションへの参加が多くあり、フロアとのディスカッションも大いに盛り上がった。

program		フォーラム【工学系】	
4月 28日 (火)	Role of Nuclear Energy for Sustainable Development (持続的発展における原子力エネルギーの役割)	会場: インペリアル カレッジ・ロンドン	
	参加者:【東大側】岡芳明、高橋浩之、岡本孝司、越塚誠一、長崎晋也、藤井康正、染矢聡、酒井幹夫、陳迎、斉藤拓巳、池尻智史【英国側】Nigel Brandon, David Dye, Matthew Eaton, Robin Grimes, Tony Goddard, Jefferson Gomes, John Harrison, Geoff Hewitt, Melville Guest, John-Paul Latham, Christopher Pain, Stephen Richardson, Mary Ritter		
29日 (水)	学生・若手研究者フォーラム		
4月 28日 (火)	Nuclear Non-proliferation and International Security (核不拡散と国際安全保障)	会場: ケンブリッジ大学	
	参加者:【東大側】田中知、Jor-Shan Choi、久野祐輔、小田卓司、山崎元泰【英国側】Philip Towle, John Simpson, George Joffe, Pervaiz Nazir, Mark Fitzpatrick, Shane Guy, Paul Cornish, Nigel Bell		
29日 (水)	学生フォーラム		



概要と報告

Role of Nuclear Energy for Sustainable Development

@インペリアルカレッジ・ロンドン

Nuclear Non-proliferation and International Security

@ケンブリッジ大学

原子力エネルギー学の教育・研究に関するフォーラムと原子力社会学に関するフォーラムをインペリアルカレッジ・ロンドン(ICL)及びケンブリッジ大学で開催した。

原子力エネルギー学について、東京大学およびICLは、それぞれ、現在取り組んでいるグローバルCOEプログラムの活動内容および英国政府主導のもとICLが中心となって進めている原子力教育プログラム「Keeping the Nuclear Option Open (KNOO)」の概要を紹介し、両校の原子力エネルギー学の教育に関する意見交換を行った。

フォーラム2日間において、両大学の教員および研究員により、原子炉設計、伝熱流動、計算科学、材料科学、放射性廃棄物などの研究に関する講演・議論を行った。両校で取り組んでいる原子力教育プログラムの意見交換を行うとともに、両校で取り組んでいる研究が世界最先端で重要であることを認識することができた。学生フォーラムでは、原子炉設計、伝熱流動、計算科学、放射性廃棄物などの研究に関するポスターセッションを開き、両校の学生間の研究交流を行った。原子力社会学については、核不拡散を中心テーマにケンブリッジ大学でフォーラムを開催した。両大学の教員、研究員および学生により、原子力エネルギー利用にとって必須である核不拡散の枠組み・課題などについて多方面から活発な議論が行われた。核不拡散問題に関する理解が一層深まる重要な契機となり、今後もこのような議論を継続して行うことの重要性が日英双方によって確認された。

問い合わせ先: 本部国際企画グループ (内)22093

NEWS

春の紫綬褒章受章

安田浩東京大学名誉教授、大学院医学系研究科・医学部永井良三教授が本年春の紫綬褒章を受章いたしました。

安田 浩 東京大学名誉教授

安田浩東京大学名誉教授（元国際・産学共同研究センター長・現東京電機大学総合メディアセンター長）が、画像符号化・画像圧縮技術およびデジタルコンテンツ流通などの情報学分野の研究における功績により、平成 21 年度春の褒章で紫綬褒章を受章されました。



デジタル化した画像はデータ量が極めて膨大になるため、その伝送・蓄積・演算処理、すなわち流通に大きな負荷がかかるという問題があります。デジタル画像情報の伝送・蓄積・演算の効率化は不可欠であり、そのためのデジタル画像圧縮および符号化に関する研究をリードして来られたのが安田先生であります。

情報量の多い画像ですが、例えば、風景写真の背景（空など）は隣合う画素同士が同じ値をとることが多く、空間的冗長度が高いと言えます。一方、連続する画像の集まりである動画では、時間的に前後する画像同士は変化しない部分が多く、時間的冗長度が高くなります。安田先生のご研究は、時間的冗長度を除去した後の画像情報に空間的冗長度を除去する処理を行い、大幅な圧縮を実現したものであります。

これらの技術は、デジカメなどの静止画圧縮方式である JPEG、医療画像等で用いられる圧縮劣化のない JPEG-LS、DVD 記録方式や地上波デジタル放送、高品質なテレビ会議方式である H.264 などに採用されています。

こうした業績に対し、この度の紫綬褒章に加え、日本や米国の主要な学会・団体などから論文賞、業績賞、功績賞等を多数受賞されています。中でも、米国テレビジョンアカデミーのエミー賞を国際標準化貢献者として初めて、また世界最大の電気電子学会 IEEE の国際標準化貢献者を表彰するチャールズ・プロテウス・スタインメッ

ツ賞を米国人以外では初めて受賞するなど、世界的に高く評価されています。

最近ではコンテンツ立国推進のため、Digital Movie Director という文字情報だけから映像を自動的に生成する画期的なコンセプトの提案とそのシステムの研究開発を精力的に推進されています。これからも安田先生の研究のご発展とご健勝を祈念してやみません。

（東京電機大学・未来科学部 高橋時市郎）

永井 良三 大学院医学系研究科・医学部教授

本学教授（大学院医学系研究科・医学部）である永井良三教授が心血管病学の研究における功績により、平成 21 年度春の褒章で紫綬褒章を受章されました。

永井良三教授は、長年にわたり心血管病の発症機序および病態に関する研究に努めてこられました。



研究を進められる中で、心血管の負荷適応を制御する鍵分子として転写因子 KLF5 を同定、心血管系だけでなく、代謝系の負荷応答にも KLF5 が関与していることを発見されました。これは、糖尿病・メタボリックシンドロームと動脈硬化に共通する分子機構であり、生活習慣病を「負荷適応の破綻」という視点から考える上で重要な概念と考えられます。その臨床応用も含めた研究のあり方は世界でも高く評価され、多くの研究者に刺激を与えております。

先生のご研究は、血管平滑筋の収縮タンパクであるミオシンの cDNA 同定に始まります。次いで 3 種類の平滑筋ミオシンアイソフォームを発見され、これが血管の発生分化や負荷応答の過程で、ダイナミックに変換することを見出されました。とくに負荷によって平滑筋細胞が成人型から胎児型に形質転換することから胎児型平滑筋ミオシン遺伝子に着目、その転写因子である KLF5 の同定へと研究を展開されました。この KLF5 は心血管系の負荷適応にかかわる重要な鍵分子であるのみならず、脂肪細胞や骨格筋におけるエネルギー代謝も制御することを発見され、「適応破綻による心血管・代謝疾患のメカニズム」に関する研究をさらに精力的に展開しております。永井教授のこうした独創的な研究業績は多くの若手研究者を惹きつけ、先生の御指導により先進的な研究成果が次々に挙げられております。

永井教授は、上記の研究成果を実用化するための研究、診療情報を臨床研究へ活用するためのシステム開発、医療の質と安全に関する調査研究、IT を用いた心血管病の疫学研究など、「基礎研究の医療への還元」や「医学知の循環」を強く意識した新しい研究領域を次々に切り拓かれ、各領域で有望な若手研究者を多数育成しております。

また、東大病院長として大学病院を改革されたことは記憶に新しいところです。最近では日本内科学会理事長として、また各省庁の医学医療関連委員会委員として、わが国の医学・医療領域の指導に尽力され、医学振興と医療改善にむけて誠心誠意努力しておられます。

これからも永井先生のご活躍とご健勝を祈念してやみません。

(大学院医学系研究科・医学部)



高齢社会総合研究機構

高齢社会総合研究機構の設立、及び 設立記念イベントの開催

一般

本年度4月1日より、総長室総括委員会の下に、高齢社会総合研究機構が設立された。当機構は、世界にも類を見ない未曾有の高齢社会を迎える日本において、直面する諸問題の解決を、様々な領域からのアプローチによって導き出し、「ジェロントロジー（老年学）」の学問分野を構築することを目指すもので、前年度までの3年間のジェロントロジー寄付研究部門の活動を踏まえて、恒常組織として設立されたものである。専任の教授は3名であるが、学内ほぼ全部の学部からの兼任教員が加わり、約30名の所帯となっている。

当機構の設立を記念して、5月26日（火）17時から、小柴ホールにおいて、高齢社会総合研究機構設立記念講演会が開催された。

設立記念講演会では、濱田純一総長の挨拶、鎌田実機構長の挨拶に引き続き、読売新聞社会保障部長の小畑洋一氏の特別講演『「長寿革命」の取材からみた日本の高齢化』が行われた。日本の高齢社会の問題・課題について、長年の取材経験をもとに、新聞記事を交えながらお話いただいた。また、当機構の秋山弘子特任教授、辻哲夫教授による2題の講演が行われ、当機構の今後行っていく活動や目指す姿について紹介があった。参加者は、学内外から約100名であった。

講演会後には、山上会館にて交流会が開催され、学内外から約60名が参加した。松本洋一郎理事（副学長）の挨拶、当機構運営委員長である医学系研究科の大内尉義教授の挨拶の後、にぎやかに懇談が行われ、活発な意見交換・情報交換がなされた。最後に、当機構運営委員である人文社会系研究科の武川正吾教授による挨拶によって盛会裏に閉会した。



濱田総長のあいさつ



講演会の様子

本部学生支援グループ

「第61回一橋大学・東京大学対校競漕大会（東商戦）」開催される

一般

4月26日（日）、一橋大学との伝統の対校ボートレースである東商戦が開催された。当日は天候にも恵まれ、今年度からは小島憲道理事（副学長）の出席のもと、応援部の力強い応援を背に盛大に行われた。

今年度も前年度以上に、両校ともにこの春の東商戦を目標にして冬の間から激しい練習を重ねてきた。しかし、レース本番ではオープン女子シングルスカル（スカルとは両手に一本ずつオールを握り漕ぐ種目）で勝利をおさめたものの、それ以外のメインのスweep種目（一人一本のオールで漕ぐ種目）も含めた全種目で一橋大学に勝利を譲ってしまうという結果になった。一方、一橋大学は花形の男子エイトで大会新記録を出すなど、かなりの完成度を見せつけていた。

今後は、今回及ばなかった一橋大学を含めた他大学トップクルーとの差を8月のインカレまでに縮め、勝利できるように部員一同、気持ちを引き締め日々の活動に全力で取り組んでいきます。今後とも漕艇部の活動を見守っていただければ幸いです。

<第 61 回東商戦結果（対校種目のみ）>

対校 W4x+ 対校 M4+
 (女子舵手付クォドルプル) (男子舵手付フォア)

東京大学	7' 45" 88	2	東京大学	7' 05" 00	2
一橋大学	7' 37" 71	1	一橋大学	6' 48" 82	1

対校 M1x 対校 M8+
 (男子シングルスカル) (男子エイト)

東京大学	8' 03" 17	2	東京大学	6' 20" 52	2
一橋大学	7' 44" 40	1	一橋大学	5' 58" 45	1

<今後の漕艇部の活動>

- 5月22日～24日 全日本軽量級選手権
- 6月21日 京大戦
- 8月20日～23日 全日本大学選手権・OX盾レガッタ
- 9月10日～13日 全日本選手権



一橋大・東大対校エイト



生命科学ネットワーク

第6回「東京大学の生命科学」シンポジウム

「東京大学の生命科学」シンポジウムは、今年で6回目を迎え、会場内が少し暑くなってしまうほど天候に恵まれた5月2日（土）に安田講堂で開催された。

本学では10以上の研究科や研究所で、生命科学に関連した研究と教育が行われており、その全容を一度に知ることは容易ではない。「東京大学の生命科学」シンポジウムは、各部局を代表する研究者に、生命科学研究の最先端を分かりやすく解説してもらうイベントで、主催は生命科学ネットワークが担当した。生命科学ネットワークは、生命科学研究ネットワークと、昨年まで本シンポジウムを主催していた生命科学教育支援ネットワークが統合し、この4月に誕生した組織である。両ネットワークの設立趣旨を踏襲し、学内の関係16部局と連携しながら、研究設備の充実や教科書作成などの活動を通じた研究教育支援に取り組んでいく予定である。

さて、シンポジウムは大型連休中ということもあり、当初は参加者の数が心配されたが、終わってみると例年を上回る851人の方々にお越しいただき、大変盛況であった。参加者は、60歳以上の方々から高校生までにおよび、特に学外の学部生の方々から、「大学院進学への参考になった」という感想を多く頂戴し、シンポジウム開催の一つの大きな目的を達成できたと思っている。

シンポジウムは、10時に濱田純一総長の挨拶から始まり、13の部局から1名ずつの講演者の先生が3部に分かれて講演を行った。今年も、植物の光合成や創薬関連の話題、さらには動物の行動や人間の進化など生命科学のさまざまな分野を横断しながら講演が進んだが、アンケートでは「3部構成それぞれの座長の先生が、うまく話をまとめていて緩やかなつながりが生まれていた」という意見をいただき、参加者に生命科学の最先端を分かりやすく伝えられたのではないかと感じている。



濱田総長



山本ネットワーク長

本シンポジウムの主旨のひとつは、進学振り分けを控える学内の教養学部1、2年生や、本学の大学院への進学を考える学内外の学生に対して、本学で行われている幅広い生命科学研究に関する情報を提供することであ

る。そのために今回も例年どおり、生命科学ネットワーク参加の各部局を紹介するブースを、安田講堂ロビーに設置した。ここでは、パンフレットなどの資料の配布や、DVD上映をする部局もあり、参加者の65%の方々から「参考になった」と評価をいただいた。



研究科・研究所紹介のブースの様子

最後に、ご講演いただいた講演者の方々、開催の準備にご尽力いただいた本部研究機構等支援グループの皆さん、農学生命科学研究科の先生方とお手伝いいただいた大学院生の皆さんに深謝いたします。

以下は当日のプログラムです。

10：00～10：05 開会の挨拶（濱田純一総長）

座長：児玉 龍彦／先端科学技術研究センター

10：05～10：25「ゲノム多様性と疾患遺伝子」徳永 勝士（医学系研究科）

10：30～10：50「異物解毒に関わる薬物トランスポーター：医薬品開発における重要性」杉山 雄一（薬学系研究科）

10：55～11：15「マルチテンプレート法による生物活性物質の創製」橋本 祐一（分子細胞生物学研究所）

11：20～11：40「特殊ペプチド創薬」菅 裕明（先端科学技術研究センター）

11：45～12：05「骨軟骨の生物学と再生医学」鄭 雄一（工学系研究科）

座長：酒井 康行／生産技術研究所

13：30～13：50「味覚のしくみの分子論」阿部 啓子（農学生命科学研究科）

13：55～14：15「マグネシウム輸送体による細胞内マグネシウムホメオスタシス機構」濡木 理（医科学研究所）

14：20～14：40「緑色光と光合成：葉は緑の光をいかに使うか」寺島 一郎（理学系研究科）

14：45～15：05「光合成の秘密に迫る」渡辺 正（生産技術研究所）

座長：大矢 禎一／新領域創成科学研究科

15：35～15：55「ヒトはどのように特別なチンパンジーか」長谷川 寿一（総合文化研究科）

16：00～16：20「海洋動物の比較行動学（スケーリング）」佐藤 克文（海洋研究所）

16：25～16：45「知性を生み出す脳の形と脳の動き」山口 陽子（情報理工学系研究科）

16：50～17：10「ヒト常在菌のゲノム科学：ヒト生物学の新たなフロンティア」服部 正平（新領域創成科学研究科）

17：15～17：20閉会の挨拶

シンポジウムのホームページ

(<http://www.biout2009.info>) にて当日配布した要旨集と同等の講演紹介がご覧いただけます。

海洋アライアンス

第4回イブニングセミナー開催



一般

5月19日（火）、本郷キャンパス工学部3号館において、海洋アライアンス・第4回イブニングセミナーが開催された。今回の講師は工学系研究科の大内一之特任教授と海洋研究所の津田敦准教授で、それぞれ海の生産力に関する以下のご講演をいただいた。

- ・拓海—海洋肥沃化への挑戦
- 大内一之特任教授
- ・海洋鉄散布実験の成果と現状
- 津田 敦准教授

大内特任教授の講演は、「拓海」という名の海洋肥沃化装置についてである。「拓海」は栄養塩が豊富な海洋深層水を有光層に撒くことにより、一次生産をあげて豊かな漁場を形成することを目指している。相模湾で行われた実証実験では、荒波にも耐えうる安全性や肥沃化水塊を一定期間滞留させる比重調整など数々の課題に直面したが、関係者の努力で5年間連続稼働を成し遂げた。この実験を主導的に進めた大内特任教授は、生物学的研究だけでなく数値シミュレーションも確立する必要があると述べるとともに、今後は海洋深層水の低温性を利用した温度差発電で拓海を動かすなど、海洋深層水の利点を最大限活用していきたいと語った。

続いて津田敦准教授は鉄散布実験の成果と現状について発表した。世界には高い栄養塩濃度にもかかわらず、植物プランクトンの量が少ない海域がある。これをHNLC海域（High Nutrients Low Chlorophyll）という。90年代、地球温暖化を背景として、HNLC海域に鉄を散布すれば二酸化炭素が減らせるという考えが生まれた。平成13年に行われた実験では、植物プランクトンは20倍にも増え、海洋表層の二酸化炭素分圧は大きく低下すると

いう成果が得られたが、津田准教授は、メタン・亜酸化窒素といったより強力な温暖化ガス発生の可能性や現時点では生態系の挙動予測が困難であるなど、問題点も指摘した。さらに生物多様性条約を根拠とした外洋における鉄散布の凍結や、海洋肥沃化を制限・禁止したロンドン条約など、実験の規制や制約が国際的に厳しくなりつつある現状を述べた。

当日会場には、各部局から多くの教授・学生が集まり、講演後には、ロンドン条約における海洋肥沃化の制限・禁止について、白熱したディスカッションが行われた。農学・工学・理学・経済学・法学などそれぞれの立場から意見が飛び交い、部局横断型組織である海洋アライアンスならではの有意義な意見交換の場となった。次回も多くの参加を期待したい。

イブニングセミナーは2カ月に1回を目処に開催され、第5回イブニングセミナーは7月に開催される予定です。詳しくは海洋アライアンスホームページをご覧ください。多くのご参加をお待ちしています。

海洋アライアンスホームページ：
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



イブニングセミナーの様子



本部奨学厚生グループ

「東京大学外国人留学生特別奨学制度
 平成21年度4月期研究奨励費受給者
 証書授与式」を開催

「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成21年度4月期研究奨励費受給者証書授与式」が、5月21日（木）11時から、関係役員等の臨席の下に御殿下記念館研修室で開催された。

外国人留学生特別奨学制度は、「大学院における特に優秀な私費外国人留学生に対し研究奨励費を支給することにより、本学での学術研究への取組を支援するとともに、諸外国からの優秀な留学生の受入促進に資すること」を目的として、平成16年度から実施されているものである。

本年度4月期は、修士課程大学院学生8名、博士課

程大学院学生28名の合計36名（月額15万円、支給予定期間：平成21年4月から標準修業年限の最終月まで）が受給者として決定され、当日は小島憲道理事（副学長）から受給者に受給者証書が手渡された。



東京大学外国人留学生特別奨学制度受給者証書授与

次いで、小島理事（副学長）から「受給者の皆さんは、本制度を受給されることを誇りに思い、学業や研究に専念してください。教職員は多いに期待しています。」という旨の挨拶があった。引き続き、受給者を代表して東京大学外国人留学生特別奨学制度採用者の大学院経済学研究科の梁実さんから、感謝のスピーチがあった。



平成21年度研究奨励費受給者と関係者

<問い合わせ先>

本部奨学厚生グループ奨学チーム
 内線 22548

学生相談ネットワーク本部

平成 21 年度第 1 回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

一般

平成 21 年度第 1 回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会が、5 月 27 日（水）に本郷キャンパス小柴ホールにおいて開催された。

本講習会は、平成 20 年 4 月に発足した学生相談ネットワーク本部の活動の一環として、平成 20 年度から実施されている。

古田元夫学生相談ネットワーク本部長の挨拶の後、学生相談ネットワーク本部精神保健支援室長の佐々木司教授による「メンタルヘルス講義」、学生相談所長の倉光修教授ら教員による「学生対応の演習」が行われた。参加者 29 名（10 部局、教員 11 名、職員 18 名）は熱心に講習に取り組んだ。質疑応答も活発に行われ、学生対応への関心の高さがうかがえた。

なお、より多くの教職員に参加していただきたい趣旨から、今年度は、あらたに白金キャンパスも加え、今後は以下のとおり開催する予定である。

【今後の実施日程】

駒場キャンパス 平成 21 年 6 月 25 日（木）

柏キャンパス 平成 21 年 7 月 15 日（水）

白金キャンパス 平成 21 年 10 月 22 日（木）

本郷キャンパス 平成 21 年 10 月 28 日（水）



古田学生相談ネットワーク本部長あいさつ



メンタルヘルス講義



学生対応の演習

部局 ニュース

大学院工学系研究科・工学部

総合研究機構 光量子科学研究センター主催
“John L. Hall 先生 若手研究者との集い”
フォーラムが開催される

3 月 25 日（水）に本学理学部 1 号館小柴ホールにて、大学院工学系研究科附属総合研究機構光量子科学研究センター（センター長 五神真教授）および同センターが進めている、文部科学省「最先端の光の創成を目指したネットワーク研究拠点プログラム」による事業「光量子科学アライアンス」の主催によるフォーラム“John L. Hall 先生と若手研究者との集い”が開催され、学内外から多数の参加があった。

本フォーラムは、光量子科学研究センターの活動として、2005 年にノーベル物理学賞を受賞されたジョン・ホール先生をお招きし、大学院生や若手研究者との交流を目的として企画されたものである。

フォーラムでは、保立和夫工学系研究科長による開式のあいさつのち、光量子科学をリードする国内の研究者として、香取秀俊准教授（工学系研究科）、小山泰弘氏（情報通信研究機構）、上田正仁教授（理学系研究科）に講演いただいた。さらに若手研究者・大学院生によるプレゼンテーションとポスター発表が行われ、会場ではホール先生との直接の議論を含む熱心な討論が行われた。最後に、学部および大学院生を対象とする工学部グローバルセミナーとして、ホール先生から若手研究者へのメッセージを込めて特別講演”From Bluejeans to Formalwear - Some thoughts for guiding young research careers, based on my 45 years of fun and progress in Lasers and Optical Physics”を行っていただき、盛会のうちに閉会した。



開式の挨拶をされる保立和夫工学系研究科長



工学部グローバルセミナーとして特別講演されるジョン・ホール先生



ジョン・ホール先生を若手研究者・大学院生らで囲んで記念撮影

大学院工学系研究科・工学部



高速中性子源炉“弥生”と電子ライナック施設が日本原子力学会歴史構築賞をダブル受賞

日本原子力学会歴史構築賞は2009年日本原子力学会創立50周年を記念して新設され、工学系研究科原子力専攻を代表する標記2施設がダブル受賞の快挙を遂げた。

高速中性子源炉“弥生”は1971年に臨海に達して以来38年に渡り、世界でも特徴ある最大1MeV程度の高エネルギー中性子源炉として、安全運転と共同利用を堅持してきた。また1994年には高速中性子科学研究プロジェクトを立ち上げ、設備と利用研究の高度化を図ってきた。一方電子ライナック施設も1999年にフェムト秒高速量子現象研究設備等を増強し、Sバンド(2.856GHz)ツインライナック・Xバンド(9.4GHz, 11.424GHz)ラ

イナック3台・レーザープラズマ加速器を擁し、世界の先進量子ビーム研究を先導し続け、今年30周年記念を迎えた。これらの業績は、現教職員・院生のみならず、多くの名誉教授、OB/OG教職員の方々の研究開発・管理の弛まぬ尽力の賜物である。加えて、工学系研究科、大学本部、地元をはじめとする学外の多くの方々のご協力のお陰と認識し、感謝申し上げる。

2008年に本学は日本原子力研究開発機構と包括的研究協力協定を締結した。今後益々近隣の同機構と協力を強化して、新たな展開を含め、原子力人材育成、研究開発、安全運転、共同利用に世界の拠点として務めていく所存である。



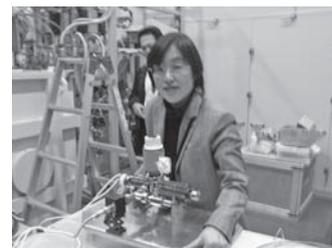
高速中性子源炉“弥生”



原子炉運転実習風景



Sバンドツインライナック



Xバンドライナック

大学院教育学研究科・教育学部

部局

春季東京都高校軟式野球大会において 附属中等教育学校が6年ぶり6回 目の優勝

5月5日（火）に教育学部附属中等教育学校の野球部は、春季の東京都高校軟式野球大会において早大学院を3-2で破り、優勝した。

決勝戦では両校譲らず延長15回を戦い、本校がサヨナラ勝ちし、この熱戦は球史に残るものであると新聞記事にも紹介されている。

5月7日（木）には武藤芳照学部長及び南風原朝和校長、千明賢治事務長らが列席の元、同校の校長室において野球部の優勝報告会が行われた。大優勝旗は暫くの間、校長室を飾ることとなった。

また、同野球部は5月下旬に埼玉県で行われる関東大会へ東京都の代表校として出場します。六大学野球同様、学内外の皆様の暖かいご声援を宜しくお願いします。

医学部附属病院

部局

合同就職説明会（六本木ヒルズ）で 看護師募集活動を実施

医学部附属病院では、看護師募集活動の一環として5月10日（日）に六本木ヒルズにて開催された(株)ディスコ主催の「2010 看護ナビフォーラム(合同就職説明会)」に参加した。

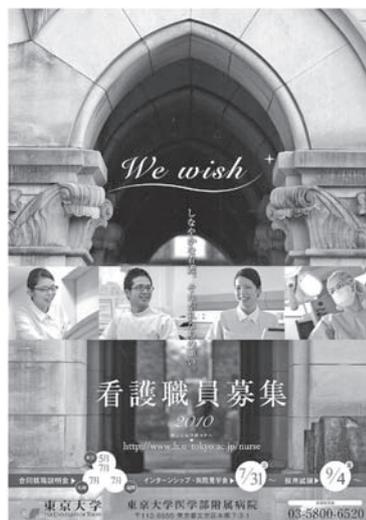
各病院の看護師募集活動の時期が年々前倒しになる傾向が強まっており、当院も今年より5月開催の就職説明会に初めて参加した。当日は1100名を超える看護学生が会場に集まり、そのうちの320名ほどが当院のブースを訪れた。対応した本院職員が休憩に入ることも困難なほどの混雑ぶり、当院への看護学生の関心の高まりを肌で感じることができた。学生たちも熱心に当院の説明に耳を傾けていた。

学生への対応は、榮木実枝看護部長を筆頭に、中島勸講師（看護職員採用推進本部長）、看護職員及び事務職員が、訪れた学生一人一人に対し当院の魅力について丁寧に説明し、それに対して多くの学生から積極的に質問が寄せられた。本説明会では通常の説明ブースとは別に、「先輩ナースに聞こう」ブースが設けられ、学生からは自分たちと年齢の近い若手現役看護師から生の声を聞くことができることもあって、大好評だった。

年々看護学生達の当院への関心が高まっていることがひしひしと感じられ、平成18年度より本格的に開始した募集活動の効果が確実に現れていることを実感した次第である。

今後、当院は7月に東京、札幌、福岡で開催される就職説明会に参加する予定である。各医療機関も例年以上に看護職員の確保には力を入れているために、気を抜か

ず、採用活動を行なっていきたいと考えている。



看護職員募集ポスター



合同就職説明会の様子

史料編纂所

部局

「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」が開催される

5月13日（水）、中国第一歴史档案館から鄒愛蓮館長らを招き、日本学士院と史料編纂所（加藤友康所長）共催による「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」が開催された。

中国第一歴史档案館は北京の故宮内に位置し、明・清代の皇帝文書など1000万件を所蔵する歴史ある档案館（文書館）であり、史料編纂所ではその協力を得て、日本関係档案のデジタル画像収集と目録出版に取り組んでいる。

研究集会では、研究代表者の保谷徹教授から、プロジェクトの研究経過が報告され、3000点を超える档案画像を受理し、目録翻訳に取り組んでいることが紹介された。

次いで、鄒愛蓮館長から「文化遺産の応急的保護と清史編纂プロジェクト」と題した特別報告が行われ、中国が国家プロジェクトとして取り組んでいる清史編纂事業とそこにおける第一歴史档案馆の役割について報告があった。清史編纂は、4000人のスタッフを擁し、10年計画でおよそ100巻を書き上げる予定と言われ、合わせて20億字相当（「四庫全書」3つ分）の史料集とデータベースを構築する計画が披露され、その規模の大きさは参加者を唖らせた。また220万件の档案画像をサーバに納め、ネットワーク上で執筆研究者500人が閲覧利用するシステムを構築するなど、最新の情報技術による史料情報共有化の試みが紹介され、議論も盛りあがった。

今回の研究者招聘は、日本学士院による日本関係未刊史料調査事業（国際学士院連合関連事業）の一貫として行なわれ、研究集会に先立って一行は日本学士院を訪問し、久保正彰院長（本学名誉教授）と親しく懇談した。



鄒愛蓮館長の報告（東洋文化研究所大会議室にて）



久保正彰院長へ「大学図」複製を贈る鄒館長（日本学士院にて）

海洋研究所

プトラマレーシア大学との学术交流
に関する協定の締結

5月25日（月）、海洋研究所とプトラマレーシア大学との間に学术交流に関する協定が締結された。当日は海洋研究所から附属海洋科学国際共同研究センターの宮崎信之教授と井上広滋准教授、プトラマレーシア大学からはNik Mustapha Raja Abdullah学長はじめ約30人の出席のもと、プトラマレーシア大学理学部において、盛

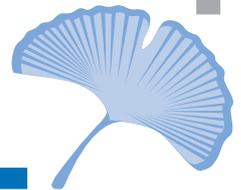
大な締結式典が開催され、その内容はプトラマレーシア大学のウェブのトップページで紹介されるとともに、マレーシア国内のテレビニュースやインターネットニュースなどのメディアにも取り上げられた。

プトラマレーシア大学は研究に重点を置くマレーシア有数の国立大学であり、海洋研究所が実施している日本学術振興会拠点大学交流事業多国間交流「沿岸海洋学」（平成13年度から22年度）を通じて、海上交通の要衝であるマラッカ海峡沿岸の海洋汚染に関する各種研究や、マングローブ域に生息するジャワメダカに関する研究など、様々な共同研究がこれまでに行われてきた。本協定の締結により、クアラルンプール国際空港に近いメインキャンパス、およびマラッカ海峡に面したポートディクソンにある臨海実験所を研究拠点として活用できるようになった。既存の共同研究をさらに発展させるとともに、生物多様性に富む東南アジアの沿岸海域、特にマングローブ域、サンゴ礁域、藻場、干潟などを舞台とする新たな共同研究の萌芽や、マレーシア国内および周辺各国の研究者を含めた強力な研究ネットワークの構築が期待される。



協定締結式典の様子

キャンパス
ニュース



本部学務グループ

平成21年5月1日現在学生数
一学部学生14,057人、大学院学生
13,764人、研究生等753人一

キャンパス

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の学生数を調査し「学内広報」に掲載している。本年5月1日現在の学生数は次のとおりである。

平成21年5月1日現在 大学院学生・研究生・外国人研究生数調

研究科等名	種別	在籍者												在籍者のうち												在籍者のうち												大学院		特別					
		専攻						博士						外国人学生(再掲)						外国人学生(再掲)						外国人学生(再掲)						院		別											
		21年度		20年度		19年度		20年度		19年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度		18年度													
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女														
人文社会系	修士	67	61	68	58	38	23	173	142	315	45	38	55	33	62	45	157	114	319	230	549	864	16	22	29	51	118	20	15	104	76	215	21	30	51	3	7	1	1	2					
	院																																												
教育学	修士	53	39	41	40	12	6	106	85	191	29	30	27	18	26	18	34	63	116	129	245	436	2	15	6	27	50	9	5	21	43	78	1	9	10	2	6	8	0	0	0				
	院																																												
総合法政政治学	修士	10	10	8	8	2	0	20	18	38	11	10	9	11	10	25	23	55	54	109	147	147	11	13	12	28	64	0	0	5	11	16	6	7	13	0	0	0	0	1	0	1	0	1	
	院																																												
経済学	修士	49	9	40	13	12	1	101	23	124	25	5	18	4	19	10	46	9	108	28	136	260	9	12	3	4	28	6	1	45	5	57	3	0	3	7	0	7	0	0	0	0	0		
	院																																												
総合文化	修士	141	96	136	101	54	29	331	226	557	105	66	85	69	95	58	187	157	472	350	822	1,379	30	48	53	86	217	30	30	97	104	261	17	21	38	16	11	27	4	5	9	9			
	院																																												
理学系	修士	300	58	282	65	18	7	600	130	730	138	36	129	31	141	31	74	26	482	124	606	1,336	24	3	17	12	56	9	1	12	8	30	3	6	11	4	15	11	2	13	13				
	院																																												
工学系	修士	757	88	884	120	137	35	1,778	243	2,021	192	31	230	62	219	44	185	50	826	187	1,013	3,034	197	96	283	95	671	37	4	45	10	96	63	27	90	17	5	22	15	2	17	17			
	院																																												
農学生命科学	修士	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	院																																												
医学系	修士	11	45	14	40	3	10	28	95	123	10	36	13	28	16	20	2	26	41	110	151	274	8	20	14	22	64	5	11	2	19	37	2	9	11	0	5	5	0	0	0	0	0		
	院																																												
薬学系	修士	64	36	75	32	2	0	141	68	209	44	14	41	11	43	5	9	5	137	35	172	381	5	5	11	7	28	3	1	2	1	7	1	3	4	1	0	1	0	1	4	0	4		
	院																																												
数理科学	修士	38	1	42	0	1	0	81	1	82	21	1	19	1	16	1	5	1	61	4	65	147	6	0	9	1	16	3	0	1	1	5	1	0	1	5	0	5	0	0	0	0			
	院																																												
新領域創成科学	修士	338	95	370	134	60	22	768	251	1,019	72	22	91	39	114	35	77	31	354	127	481	1,500	49	45	55	29	178	24	8	14	8	54	15	14	29	3	4	7	0	3	3				
	院																																												
情報理工学系	修士	191	10	190	18	28	2	409	30	439	41	5	74	5	50	3	42	5	207	18	225	664	49	12	59	7	127	9	1	14	1	25	4	29	4	0	4	4	0	4	0				
	院																																												
学際情報	修士	51	29	62	31	16	13	129	73	202	14	19	24	11	19	15	33	17	90	62	152	354	24	26	16	21	87	10	6	17	11	44	11	21	32	1	0	1	1	2	2				
	院																																												
公共政策学	修士	65	34	81	30	14	6	160	70	230	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	院																																												
合計	修士	2,288	685	2,435	756	389	156	5,122	1,597	6,719	968	426	1,044	421	1,044	407	1,108	628	4,164	1,882	6,046	12,765	456	351	685	490	1,982	175	88	437	334	1,034	177	161	338	88	55	143	61	21	82				
	院	(279)	(136)	(271)	(157)	(83)	(73)	(533)	(366)	(999)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(999)	(14)	(8)	0	0	(22)	(10)	(18)	0	0	(28)	0	0	(10)	(9)	(17)	(14)	(31)	(4)				

備考

1. 専門職学位課程は、〔 〕書きで示し外数である。
2. 農学生命科学研究科、医学系研究科の下段学生数は、平成17年度以前の入学者を示し、外数である。
3. 修士及び専門職学位課程の20年度(以前)の欄については、工学系研究科原子力専攻は平成20年度以前の入学者、他の研究科(教育部)の専攻は平成20年度入学者を示す。
4. 大学院研究生、特別研究生欄の()内は、外国人を示し内数である。
5. 外国人学生には在日外国人を含む。
6. 教育学研究科の大学院科目等履修生(29人)
7. 法学政治学研究科(法曹養成)の大学院科目等履修生(9人)
8. 工学系研究科の大学院科目等履修生(0人)
9. 薬学系研究科の大学院科目等履修生(0人)
10. 情報理工学系研究科の大学院科目等履修生(3人)
11. 公共政策学教育部の大学院科目等履修生(9人)
12. 情報学環教育部研究生(142人)

INTERVIEW

放射光連携研究機構 (SRRO)
機構長 尾嶋 正治 教授
(大学院工学系研究科)

放射光連携研究機構は、世界最高の高輝度放射光を用いて生命科学・物質科学における最先端科学を展開し、これらを体系化することにより、生命科学と物質科学の融合ならびにシナジー効果による新しい研究分野の創出、技術の発展、若手の育成等を主な目的として、2006年5月に設立されました。放射光という一般的には馴染みが薄く難しい研究分野について、どのような活動をされているのか、機構長である尾嶋正治先生の研究室を訪ね、お話を伺ってきました。

Q. 発足の経緯は？

尾嶋 東京大学として生命科学と物質科学における最先端の科学を展開し、双方の研究成果によるシナジー効果で新しい研究分野を創出し、この分野で世界をリードすることを目指して機構を始動することになりました。当機構の研究は、放射光そのものの研究はもとより、放射光を使って様々な物質の成り立ちを詳細に解明することにより、色々な分野の研究促進にも寄与しているといえます。資金集め等は大変ですが、外部資金を獲得するなど工夫して運営しています。東京大学には世界最先端の物質科学・生命科学の研究をやっている人たちがたくさんおられますから、全学的組織として、放射光利用共同研究を行うことは有益なことといえます。



Q. そもそも放射光とは？

尾嶋 光速に近い速度で運動する電子が、磁石などによって軌道を変えられた際に発生する指向性の高い電磁波のことを放射光と呼び、1947年に米国の電子シンクロトロン(円形加速器)で観測されました。電子はいわば光を雲のようにまとっていますが、電子を加速して磁石で軌道を曲げると急な加速について行けない光の雲が接線方向に外に飛び出します。例えば、傘を回すと雨の飛沫が飛び散るのと同じように、その飛び散った飛沫が放射光です。

外周約1.4kmのSPring-8という巨大な放射光施設を使用することによって、極めて高輝度な放射光が得られ、物質の構成や機能の解明や新しい物質の開発をすることが可能となります。これは石油代替エネルギーの開発にも繋がり、低炭素社会をめざす研究として社会的インパクトは極めて大きいと考えております。

Q. 我々の生活との結びつきは？

尾嶋 細胞中のタンパク質が、どのように細かく分解されていくのか、これまでは不明でした。それが放射光を当てることにより、その分解のメカニズムが解明されつつあります。また私は素人ですが、豚インフルエンザウィルスの表面にある突起状タンパク質の構造や付着メカニズムを解明することが出来れば、ウィルスの無毒化が出来るのではないかと考えています。身近なところでは、血中のヘモグロビンは酸素を運ぶわけですが、ヘモグロビンの中心にある鉄原子がどうやって酸素を吸着して運ぶのか、その仕組みを電子論的に解明することが出来ます。さらに21世紀は環境・エネルギーの世紀と言われておりますから、「グリーンナノテク」の研究、すなわち新しい燃料

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

東京大学放射光アウトステーション



電池や省エネデバイス、などの研究に放射光はなくてはならないツールになると確信しております。

Q. 苦勞している点は？

尾嶋 生命科学と物質科学という分野間の違いから、双方の話がストレートに伝わりにくいといった面はありますが、意外な発想の転換やシナジー効果による有益な面の方が多く、これは双方にとって研究を推進していく上で重要なことだと思っております。

Q. 今後のイベントは？

尾嶋 7月23日(木)・24日(金)に物性研短期研究会を開催します。これは全国の研究者向けのもので、これまでの研究成果の発表と併せて様々な方面から放射光を使った研究計画について議論・検討を行うものです。研究分野をより発展させるためには、こうしたエキスパートを中心とした研究会が非常に大切と考えております。また、今年の1月に科学技術振興機構の支援事業であるスーパーサイエンスハイスクール指定校の高校生を安田講堂に招き、当機構が共催して放射光公開市民講座を行いました。今後もこういう活動を通じて、未来の研究者の育成に繋がりたいと考えております。

Q. 今後の予定と目標は？

尾嶋 本年9月のSPring-8物質科学ビームラインの本格稼働に向けて全力を挙げております。具体的にはビームライン調整・分光特性評価、3種類の実験装置の立ち上げ、全国共同利用の開始を行うべく予定しています。更に兵庫県や民間会社との共同研究も積極的に進めていきます。我々の研究は、やはり社会の役に立っていかないと意味がないと思っております。

また、このアウトステーション(上図)は近い将来、世界最高性能の放射光が利用出来る実験室となり、最先端の共同研究の場として魅力的なサイエンスが続々と生まれて来るものと期待しています。そこには人材育成も欠かせません。特に若い研究者の発掘に力を入れていきたいと考えております。(インタビュー:鈴木・清水)

●関連ホームページ●

放射光連携研究機構

<http://www.oshimalab.t.u-tokyo.ac.jp/SRRI/index.html>

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ(内線20484)

＋ UTEC創立5周年記念式典開催 成功事例の顕在化が始まり、 今後の活動への期待が一層高まる



左より、UTEC南直哉会長、濱田純一総長、ARCH Venture Partners共同創業者スティーブン・ラザラス氏、UTEC郷治友孝社長

株式会社東京大学エッジキャピタル（UTEC）は、4月1日に創立5周年を迎えました。これを記念し、4月16日（木）に小柴ホールにおいて記念式典が開催されました。式典では、濱田純一総長の挨拶に始まり、シカゴ大学発のベンチャーキャピタルであるARCHベンチャーパートナーズの共同創業者スティーブン・ラザラス氏による基調講演がありました。

濱田総長の挨拶では、5周年への祝辞とともに、今後のUTECの活動への期待と東京大学との協力関係の強化について語られました。ラザラス氏のご講演では、シカゴ大学におけるベンチャーキャピタル活動と大学の研究成果をベースとした起業・ベンチャー支援のご経験を披露していただき、同日発表されたUTECとARCHとのアライアンスへの期待が述べられました。

100名を超える参加者の前で決意表明！

UTEC郷治友孝社長は、東京大学の技術を中心としながらも、海外を含めた他大学・研究機関の技術を組み込み、ベンチャーの成功確率・競争優位性の向上を目指し、国際的にも活動範囲を拡大すると述べられました。また社員一同全力で成功事例の更なる構築へ向けて活動していく旨の決意表明をされました。

3月26日（木）、ジャスダック証券取引所NEOに、UTECのリード投資先として初めて上場したテラ（株）矢崎雄一郎社長、続いて投資先企業の（株）モルフォ平賀督基社長、アドバンスト・ソフトマテリアルズ（株）原豊社長からは、創業からのUTECとの関係と起業・ベンチャー支援におけるUTECの役割をご紹介いただきました。

式典は100名を超える参加者を集め、UTECの活動、投資先企業の成功への期待の大きさを改めて実感するものとなりました。

連絡先：産学連携本部（本部産学連携グループ）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

＋ 東京大学・ネスレ共同記者会見 連携で「食と生命」の国際共同研究を開始

5月20日（水）農学部3号館4階大会議室にて「東京大学・ネスレリサーチセンター（以下ネスレ）共同記者会見」が行われました。

記者会見には、ネスレ側からは、ピーター・バンブラーデレン所長（ネスレリサーチセンター）ほか2名、東京大学側からは、松本洋一郎理事（副学長）、影山



固く握手するピーター・バンブラーデレン所長と松本洋一郎理事（副学長）

和郎産学連携本部長、阿部啓子農学部教授が出席しました。

学術研究において世界をリードする東京大学農学部と、世界最大の栄養・健康・ウェルネス企業のネスレが共同研究することにより、「食と栄養」分野の研究を促進し、「知のネットワーク」構築を目指します。研究のプラットフォームの1つとして、ネスレの寄附による「食と生命」総括寄付講座が6月1日からスタートします。年内には「ネスレリサーチセンターユニット」（仮称）を設置し、2010年農学部敷地内に新設予定のフードサイエンス棟に入居予定です。

＋ 第15回科学技術交流フォーラム開催 「食の安全 Food Safety」

注目されているテーマだけに参加者が殺到

4月23日（木）、山上会館2階大会議室で、第15回科学技術交流フォーラム「食の安全 Food Safety 安心で健康な生活を支える食の安全科学の展開」が開催されました。産業界から定員をはるかに上回る200名余が参加し、食の安全に対する関心の高さに関連業界の広がりがうかがわれました。熊谷進教授（食の安全研究センター長）の基調講演後、内閣府ほか、学内5大学院研究科から9つの講演が行われました。

今回新しい試みとして、講演と講演の間の休憩時間にポスターセッションを設けました。10題の発表すべてに多くの参加者が集まりました。講演者との距離が近く、質問も気軽にできるので、活発な議論が行われ、参加者にも好評でした。

講演会終了後、同会館1階ラウンジで開催された交流会では、参加者と講演者が活発に意見交換をする姿が定刻を過ぎるまで見受けられました。今後も社会のニーズに応える「東京大学ならではの」産学連携の契機を企画してまいります。



基調講演をされる熊谷進教授（食の安全研究センター長）

ポスターセッションで参加者に説明する関崎勉教授（食の安全研究センター）

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No. 19



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
 - イベント掲載フォームから送信！
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
 - メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
 - オフィス；本郷キャンパス
第二本部棟403号室

インタープリターズ・ バイブル

vol. 23



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

『夜の熱気の中で』

廣野喜幸

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

1967年公開の『夜の大捜査線』は5部門でアカデミー賞に輝いた秀作である。米国北部で働くアフリカ系アメリカ人刑事ティップス(シドニー・ポワチエ)は南部で列車を待つあいだに、殺人事件の容疑者として連行される。嫌疑はすぐ晴れるものの、白人の警察署長(ロッド・スタイガー)とともに捜査にあたることになり、数々の差別に直面する。しかし、ティップスの能力や人となりに触れるにつれ、署長は態度を変容させていく。見送りの際、署長自らティップスの荷物を運ぶラスト・シーンは印象に残る。

原作はジョン・ポール(1911-88)の『夜の熱気の中で』(1965年)。米国探偵作家クラブ最優秀新人賞と英国推理作家協会外国作品賞を受賞した佳作である。原作では、ティップスがペーパーバックを紐解くシーンが効果的に使われている。駅で連行されたときも読書中であった。さて、ティップスが読んでいたのは何だったろうか。ジェームズ・コナント(1893-1978)の『科学を理解するためにー歴史的アプローチ』(1947年)であった。

コナントはプリーストリー賞を受賞した優秀な化学者だが、原子爆弾開発推進者としての方が有名だろう。野心家の彼は、望み通りハーバード大学学長に抜擢されるや、辣腕をふるい、20年(1933-53年)に及ぶ学長職のあいだに大学の近代化を成功させた。1945年には米国科学振興協会会長(科学コミュニケーションの旗振り役)も努める。コナントは人々の科学リテラシーを高めるためには、同時代の科学は高度化しすぎていて適切な素材とはならないと判断し、科学史を通じた科学コミュニケーションを構想した。それを具体化したのが『科学を理解するために』であった。

大学で経営学を専攻したジョン・ポールは、戦時中輸送用飛行機の訓練教官を努め、職を転々とした後、60年代に作家となった。職歴の中には、子ども向けの科学読み物の執筆や宇宙科学研究所の広報官が含まれる。そう、ジョンは科学ライターであり、科学コミュニケーターでもあった。ティップスが『科学を理解するために』を読むシーンは、彼の知性の高さをさりげなく読者に伝える。しかし、それだけではなく、自分の専門外にも旺盛な好奇心をもってはじめて真の教養人なのだというコナント譲りの思想・メッセージもそこには潜んでいるように思えてならない。

あなたも科学技術インタープリター養成プログラムで真の教養人に近づいてみませんか。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

コミュニケーションセンターだより No.58

五月祭、大変賑わいました!!

■学生の皆さんも雨の中お疲れさまでした。

皆様お久しぶりです。3回ほど学内広報をお休みさせて頂いていたのですが今月から復帰致しました!!

5月30日(土)～31日(日)に開催された五月祭での出店も無事、成功の運びとなりホッと一安心しています。両日とも天候があまり良くなく、五月祭にいらっしゃるお客様も少ないのでは、と心配していたのですが、店内は(もちろん構内も含めてですが)とても賑わっていましたし、素敵な笑顔を沢山お見かけすることが出来て、やはりイベントはいいなとしみじみ思いました。



店内も午後になると歩けないほど沢山の皆様で賑わいました!!

■研究成果商品が大人気でした。

五月祭は本当にお客様が多く、毎年シャープペンシルやボールペンといったような気軽にお土産として購入できる商品が人気を得ていたのですが、テレビの放映効果も重なってか、東大サブリメントや「蓮」関連商品等の研究成果商品が非常に人気でした。



体力式アミノ酸: 2205円(税込)
乾杯式アミノ酸: 1554円(税込)

蓮香オードパルファム: 2100円(税込)
蓮香あぶらとりがみ: 420円(税込)

(担当: コミュニケーションセンター 山下)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN: 月曜～土曜 10:30～18:30
電話: 03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト / 第40回

Rings around the UT

教養学部等学生支援課厚生係

小久保 裕之さん

三鷹国際学生宿舎を覚えてください!

「厚生係」と聞いて仕事内容のイメージをできる方は少ないと思いますが、主に『三鷹国際学生宿舎』に関する業務を担当しています。

『三鷹国際学生宿舎』は、その名前にあるとおり三鷹市にあり、主に学部の1・2年生を対象とした学生用の宿舎で、現在留学生を含め約600名の学生が暮らしています。1部屋の広さは13㎡、ミニキッチン、シャワーなどを備えた完全個室型の宿舎です。

宿舎には宿舎生会・院生会という学生の自治組織があり、音楽祭、映画の上映会などの企画、留学生の生活の援助などの活動を通じて、宿舎の運営に大きく関わってもらっています。こちらが助けられることも多く、学生の力は大きいということを日々実感しています。

普段あまり意識しませんが、「何のために今の仕事をしているのか」ということを、直接学生と話して実感できることが、今の職場の一番の魅力です。



事務室にて



大好きな厚生係のみんなと

得意ワザ: 体力勝負!

自分の性格: しつこくついていく!!

次回執筆者のご指名: 佐々木一孝さん

次回執筆者との関係: あひるの仲間

次回執筆者の紹介: FWからGKまでこなすユーティリティプレイヤー!

もう少しあひるに参加してね。

※ 全てサッカーです・・・

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 (CNBI)

CNBI 共催・富士フィルム寄付講座シンポジウム
生体認識分子の進化と深化：産学連携による工学的展開

2006年10月、CNBIの産学連携の一つとして寄付講座「生体認識分子工学（富士フィルム）」が開設され、工学系研究科上田宏准教授により開発された新規免疫測定法「オープンサンドイッチ・イムノアッセイ」の更なる発展を目指した共同研究が行われてきました。今回、その成果をご報告するとともに、今後あるべき生体認識分子と診断・治療技術について広く皆様と討論する場として、標記シンポジウムを企画いたしました。学内外を問わずどなたでもご参加いただけますので、ご興味のある方はぜひご来場ください。

日時：7月18日（土）13：00～17：30
会場：本郷キャンパス 理学部1号館 小柴ホール
定員：200名
参加費：無料
申し込み方法：下記サイトからお申し込みください。席に余裕があれば当日参加も承ります。
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/activities/090718fuji/indexfuji.html>

プログラム

13：00～13：10 開会挨拶
戸田雄三執行役員 富士フィルム
13：10～13：50 杉村和久教授（鹿児島大学）
「ファージディスプレイ法によるアルツハイマー認知症のワクチン分子の設計」
13：50～14：30 北森武彦教授（東京大学）
「マイクロ化学技術による次世代診断分析－現状と展望」

14：30～15：10 藤井郁雄教授（大阪府立大学）
「ポスト抗体医薬：試験管内分子進化法による分子標的ペプチドの創出」
15：30～16：10 小林典裕教授（神戸薬科大学）
「低分子生体活性物質の免疫測定法：現況と高感度化への抗体工学的アプローチ」
16：10～16：50 上田宏准教授・伊原正喜特任助教（東京大学 富士フィルム寄付講座）
「オープンサンドイッチ原理に基づく各種低分子免疫測定系の構築」
16：50～17：30 都築博彦主任研究員（富士フィルム）
「抗体可変領域断片を活用した新規分子インプリンティング技術」

17：30 閉会の挨拶

18：00～20：00 懇親会
（東京大学山上会館食堂 3,000円）

お問い合わせ
東京大学 ナノバイオ・インテグレーション研究拠点
担当：長沢
TEL 03-5841-8446（内28446）FAX 03-5841-1510
E-Mail nagasawa@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

募集

募集

生産技術研究所

集まれ！ 発明王 第7回東京大学学生発明コンテスト

今年で第7回を迎える発明コンテスト。本学の学生であればどなたでも参加できますので、皆様ふるって応募してください。また、教職員のみなさまにはコンテストの趣旨を、広く学生の方々に周知していただきますようお願い致します。

募集趣旨：若い学生のみなさんの柔軟な頭脳は、「ひょっとしたらノーベル賞級の大発明」につながるアイデアの宝庫かもしれません。これからは、新しいアイデアを個人の内に秘めておくばかりではなく、その権利を社会に主張していくことが大切です。本学では、柔軟な思考を持つ学生のみなさんの豊かな発想とアイデアを支援し、それを形にするために、毎年発明コンテストを企画しています。バリバリの研究成果から、アイデア勝負のハッタリ応募まで、広い心で歓迎します。本企画を通じて、豊かな発想を大きな果実に実らせていただくとともに、

「知的財産」に対する理解を深めていただくことを期待しております。将来、弁理士や弁護士を目指す人、勉強になりますよ。

応募資格：本学の学生（学部学生・大学院生等）
応募期間：5月28日（木）～9月30日（水）（必着）

※まずは下記アドレスに氏名、所属、メールアドレスを送信してエントリー！折り返し応募書類ならびに過去の応募例などをお送りします。

エントリー先：hatsucon@iis.u-tokyo.ac.jp

日程：

10月下旬：書類審査終了 予備審査結果の通知
12月22日（火）：本審査 プレゼンテーション
平成22年1月初旬：審査結果の通知
平成22年1月下旬：表彰式

募集分野：

アイデアのみでも試作品段階でも結構です。

一般部門：日用品から専門知識を活かしたものまで、発明の分野を問いません。

課題部門：今年から課題部門を新設！今回のテーマは「学生生活を快適にする発明」です。

審査：生産技術研究所（産学連携委員会）、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）、弁理士の関係者で行う予定

※審査においては、特許性よりもアイデアを重視する予定です。

表彰：発明大賞、産学連携本部長賞、生産技術研究所長賞、アイデア賞、奨励賞（数件）

※各賞に賞状、（株）ニコンより豪華副賞、賞金（総額50万円）／参加者全員に記念品

※優秀な発明に対しては、特許出願のアドバイス

※一人で複数の発明を応募しても構いませんが、発明ごとに別々に応募してください。

主催：生産技術研究所、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）

詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先・応募先：

〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学生産技術研究所内

財団法人生産技術研究奨励会 発明コンテスト係

電話：03-5452-6094 Fax：03-5452-6096

E-mail: hatsucon@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第521（6月3日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第521号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

菅原克也：訳読について

池田信雄：岡部雄三君を偲んで

〈教養学部 教員紹介2009（3）〉：

学生相談所／進学情報センター／留学生相談室／AIKOM／駒場博物館／ドイツ・ヨーロッパ研究センター／東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ／複雑系生命システム研究センター／人間の安全保障／生命科学構造化センター／駒場保健センター／教養教育開発機構（企画部門・開発部門・実施部門・寄付部門・NEDO特別部門）

〈本郷各学部案内・2〉

木村英樹：「文」学部の「夢」

伊藤元重：経済学とは

武藤芳照：あなたの「教育」を科学する

～からだを育み、心を育み、人を育む～

山形俊男：自然の仕組みと理を知るところ

——理学部への誘い——

生源寺眞一：農学部に学ぶ幸福を分かち合う

池谷裕二：薬学部は総合生命科学研究の拠点

ピアノ委員会：第7回 教養学部ピアノ演奏会
ジャズ・カルテット

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

レポート・論文や、ゼミ発表の準備の際、文献探して困ったことはありませんか？参考文献リストの作成で、苦勞していませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。夏休み前に、ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(各回先着12名・予約不要)

※7/1は駒場図書館(各回先着24名・予約優先)

※7/30は農学生命科学図書館(先着12名・予約不要)

●日時・コース：

■7/1(水)13:30～14:30 毎日Newsパック特別コース【今回限定】

毎日新聞社の新聞記事データベース「毎日Newsパック」についての今回限定コースです。提供元より講師を招いて開催します。※会場は、駒場図書館です。

■7/1(水)14:45～15:45 聞蔵Ⅱビジュアル特別コース【今回限定】

朝日新聞社の新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」についての今回限定コースです。提供元より講師を招いて開催します。※会場は、駒場図書館です。

■7/3(金)15:00～16:00 文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

■7/28(火)15:00～16:00 文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

4月よりWeb上で使える文献管理ツール「RefWorks」のサービスを開始しました。論文の参考文献リスト自動作成などに活用できる、便利なツールです。ユーザ登録や基本的な使い方を実習します。

■7/10(金)15:00～16:00 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文の代表的データベース「CiNii」(サイニイ)の使い方を中心に解説します。

■7/15(水)15:00～16:00 電子ジャーナルを利用するには？

電子ジャーナルを使えば、欲しい論文の本文がWebで簡単に見られます。代表的な電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。また、「UT

Article Link」(東京大学学術論文リンク)を使ってデータベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■7/24(金)11:00～12:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献検索方法を、まとめてコンパクトに解説します。

■7/30(木)15:00～16:30 農学分野の論文を探すには？AGRICOLA特別コース【今回限定】

農学分野の学生・研究者の方、ぜひご参加ください。農学関連の文献データベースAGRICOLA(約200誌の全文データベースProQuest Agriculture Journalsとセットで利用可能)についての今回限定コースです。提供元より講師を招いて開催します。

※会場は、農学生命科学図書館です。

●参加費：無料

月	火	水	木	金
		7/1 13:30 - 14:30 毎日新聞DB 14:45 - 15:45 朝日新聞DB	7/2	7/3 15:00 - 16:00 RefWorks
7/6	7/7	7/8	7/9	7/10 15:00 - 16:00 日本の論文
7/13	7/14	7/15 15:00 - 16:00 電子ジャーナル	7/16	7/17
7/20	7/21	7/22	7/23	7/24 11:00 - 12:00 早わかり
7/27	7/28 15:00 - 16:00 RefWorks	7/29	7/30 15:00 - 16:30 農学分野 AGRICOLA	7/31

※どのコースも、自宅からの利用方法の説明を含みます。

※7/1の会場は、駒場図書館です。

※7/30の会場は、農学生命科学図書館です。

●問い合わせ(7/1の予約はこちら)：

情報基盤センター 学術情報リテラシー係

03-5841-2649(内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

本部学生支援グループ

東京大学音楽部管弦楽団 サマーコンサート 2009のお知らせ

当団は毎年東京近郊と日本各地でサマーコンサートを開催しております。今年度の日時・会場・プログラム等詳細について、ご案内いたします。

<神奈川公演>

7月11日(土) 18:00 開場 18:30 開演
ハーモニーホール座間 大ホール

<東京公演>

7月25日(土) 18:00 開場 18:30 開演
昭和女子大学人見記念講堂

<静岡公演>

8月1日(土) 18:00 開場 18:30 開演
富士市文化会館ロゼシアター 大ホール

<大阪公演>

8月3日(月) 18:00 開場 18:30 開演
ザ・シンフォニーホール

<松山公演>

8月4日(火) 18:00 開場 18:30 開演
松山市民会館

指揮：三石 精一(当団終身正指揮者)

曲目：

ブラームス

交響曲第4番ホ短調

シューマン

「序曲、スケルツォとフィナーレ」

ワーグナー

「さまよえるオランダ人」序曲

料金：大阪 全席指定 1000 円
他 全席自由 1000 円

チケットのお申し込み・お問い合わせ：

当団ホームページ (<http://www14.plala.or.jp/b7k-z/>)
またはメールアドレス ticket@todaiorch.cjb.net までご連絡ください。

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「小穴純とレンズの世界」展

小穴純(1907 - 1985)は、第一高等学校・東京帝国大学理学部物理学科を卒業し、その後、東京帝国大学、東京大学、上智大学に勤務した日本の物理学者で、主に

光学実験の分野で活躍しました。2006年冬～2007年春にかけて、第一高等学校と緑の深い駒場博物館に、小穴の使用した実験機器類・データ、日記・ノート類を含む文書等が寄贈され、当館ではその後、資料の整理と修復を行ってまいりましたが、このたび、小穴の研究を振り返りながら日本の光学および光学技術の歩みを概観し、併せて光学の諸原理を身近に経験できる実験・機器を紹介することを目的に、下記の展示を企画しましたのでご紹介いたします。

当館では、例年、夏休みの特別展として、若年層や一般の来館者にも理解しやすい展示を企画し、ハンズオンのコーナー等も設けています。

●会場

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館

TEL 03-5454-6139 FAX 03-5454-4929

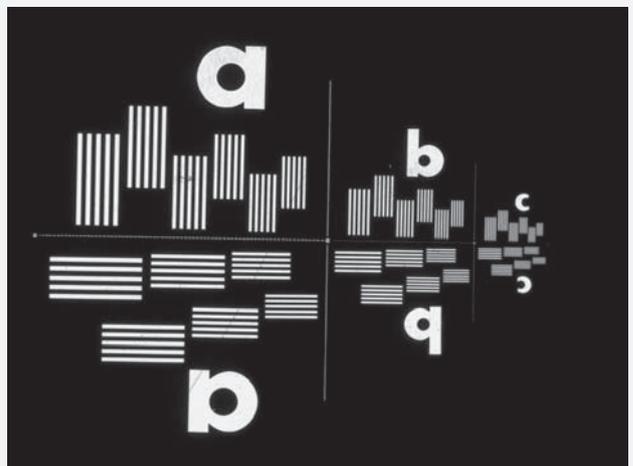
URL: <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>

●展示期間

7月18日(土)～9月23日(水・祝日)

土日祝日開館、火曜休館。ただし、9月22日(火)は開館。
開館時間 10:00～18:00(入場は17:30まで)

イベント情報等最新の内容は、上記当館ホームページにてご確認ください。



小穴式チャート図

お知らせ

海洋研究所

「一般公開：中野キャンパスより感謝をこめて！」のお知らせ

海洋研究所では、研究成果や海洋の知識をわかりやすく紹介し、研究所への理解を深めていただくために、一般公開を下記のとおり行います。

子どもから大人まで楽しめる企画を多数用意して、海洋と地球環境とのかかわりなど「海」の重要性についてお伝えしたいと思います。東京都中野地区と、岩手県大槌地区でそれぞれ下記の日程で開催いたします。多数の方々のご来場をお待ちしています。

<東京都中野地区>

日時：7月18日(土) 11:00～16:30

場所：海洋研究所中野キャンパス

- 市民講座 (13:00～14:00)
「潮汐が作る海・気候・魚の長期変動」
(安田一郎教授)
「メダカではかる環境汚染」
(井上広滋准教授)
「中野キャンパスにおける海洋研究所のあゆみ」
(寺崎誠名誉教授・前所長)
- ロープワーク・・・あなたも船乗りになってみよう!
- 研究所を知る、最後の「海洋研究所ツアー」
- 各研究室の展示：
2009年海底の旅、ミニ水族館、楽しい渦巻き実験、星砂を探そう、タッチプール、海藻の押し葉づくり、アワビの赤ちゃんを顕微鏡で見ようなど、体験型の企画が盛りだくさん
- 研究船が持ち帰った世界最深1万メートルの“海の水”もお土産に!

<岩手県大槌地区>

日時：7月20日(月・祝日「海の日」) 10:00～15:00

場所：東京大学海洋研究所国際沿岸海洋研究センター
(岩手県上閉伊郡大槌町)

テーマ「三陸の海と生き物に親しもう!!」

- お魚ふれあいコーナー・沿岸生物・各種パネルなどの展示
- 研究船「弥生」船内見学コーナー
- 所内見学ツアー
- ロープワークコーナー
- 講演 (13:00～)
「大槌周辺および世界中の海に生息する動物の比較行動研究」(佐藤克文准教授)



陸の海に夢中になる子供達 (平成20年度一般公開)

詳しくは、ホームページをご覧ください。

<http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/event/j/uminohi2009.html>

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第64回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第64回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、植物画家の長谷川哲雄氏の指導による、日光植物園での植物観察会です。植物の観察だけでなくスケッチも行います。植物の生活の仕方や形の意味を考えながら、植物を詳しく観察して描くことで、植物そして自然の面白さ、奥深さに触れていただこうというセミナーです。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいませよう、ご案内申し上げます。

講師：長谷川 哲雄

演題：「植物観察と植物画の楽しみ—見る、描く、発見する—」

日時：8月1日（土）13時～15時
 場所：理学系研究科附属植物園日光分園（日光植物園）
 庁舎
 参加費：無料（但し、一般の方は入園料が必要です）
 用意する物：スケッチブック（普通の画用紙のもので、サイズはA4くらい）、鉛筆（HBないしF）、消しゴム、できればルーペ（5～10倍程度のもの）
 参加申込方法：7月21日（火）までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。
 主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1
 東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
 小石川植物園後援会
 koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp
 問い合わせ先：理学系研究科附属植物園
 杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト（TSCP）室

使い方の工夫でCO₂排出削減に相乗効果を！

本学では、サステナブルキャンパスの実現を目指して、“TSCP”として、キャンパスのCO₂排出量の総量削減に向け全学的な取り組みを始めています。

この取り組みの一環で、平成20年7月より、本郷、駒場、中野、白金のキャンパスに残っていた効率の低い照明機器（計38,602台）を高効率な照明器具へ更新する対策、医学部附属病院に設置されている冷房用の冷水を製造する大型冷凍機を更新する対策などを実施しています。今年度以降も、様々な機器を効率のよいものへ更新していく予定ですが、これらの対策は、いわばハード面の対策となります。加えて、省エネルギー・省CO₂の観点からは、“日々の使用における対策”、言い換えればソフト面の対策も併せて行なうことでより大きな相乗効果がうまれます。

日々の使用における対策といってもさまざま、既に実行をされている方も多いと思いますが、今回、照明の消灯運用、冷房時の空調設定温度（28℃設定の徹底）の緩和運用の2点のお願いについて、学内に各々意識啓発ポスターを掲示します（ポスターは、本学の学生によるデザインです）。

ハード面とソフト面の両面から実効ある省エネルギー・省CO₂対策を行ないたく、是非ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

効果の試算

【昨年度に実施済みのハード面の対策】

毎年4,000トン以上のCO₂排出量を削減することが可能です。

【日々の使用におけるソフト面の対策】

下記2つの運用を全て実施できたと仮定すると、毎年合計で5,700トン以上のCO₂排出量削減が可能となります。これは、本学の総CO₂排出量の4%近くとなります。

照明の消灯運用（昼休み）：1,700トン/年
 空調の設定温度緩和の運用：4,000トン/年

問い合わせ先など

TSCP室（内線20500～20502）
 （TSCPの詳細は、ウェブサイト
<http://www.tscp.u-tokyo.ac.jp/> をご覧ください）



冷房時の空調設定温度の緩和運用



照明の消灯運用

第82回五月祭開催

五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭

5月29日(金)は、あいにくの雨でスタートしましたが、前夜祭の時間が近づくと、まるでそれを予期していたかのように雨が止み、昨年度より大きさ、鮮明度ともにパワーアップした大型スクリーン(安田講堂前設置)によってイベントが催され、祭の始まりを盛り上げました。



前夜祭イベントの様子

開催日

5月29日(金)午後 学内公開
30日(土) 両日 一般公開
31日(日)



今年のマスコット

今年は、講演会、研究成果の展示、音楽演奏、各種パフォーマンスや模擬店等、約390件の企画が参加しました。期間中、屋内は実験の参加型企画やバンド演奏等で賑わい、屋外は模擬店への呼び声やパフォーマンスへの歓声が響き渡り、いつもと違う賑わいのキャンパスの中、祭を楽しみ、祝う人々の笑顔がたくさんありました。



安田講堂前銀杏並木の様子

開催にあたって、五月祭常任委員会(学生側代表)は、昨年に引き続き、麻疹、百日咳等対策に取り組みました。また、直前に国内感染者の出した新型インフルエンザについては、大学側と協議を重ね、参加企画者の参加基準の設定、模擬店企画へのマスク着用義務化等、参加企画全構成員の体温記録提出を義務付ける等の感染予防策を行うとともに、来場者へ向けては、Webページおよび当日立看板等にて体調不良者等の来場自粛およびマスク着用等の協力を呼びかけました。



新型インフルエンザ
注意喚起立看板(赤門前)

なお、天候に恵まれず途中、豪雨に見舞われたにも関わらず、一般公開日の2日間で、約66,000人(昨年度65,000人)もの方にご来場いただきました。

今年の五月祭も滞りなく無事に終了しました。ご協力いただいた学内関係者、ご来場の皆様に深くお礼を申し上げます。来年もよろしく願いいたします。



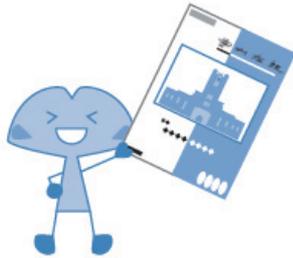
今枝委員長挨拶(フィナーレ:31日)

■本件問合せ先: 本部学生支援グループ 宮内(内線:22514)

五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭

五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭

平成21年度 学内広報 発行 スケジュール



号数	原稿〆切	発行日	配布
1388	7月 1日(水)	7月 27日(月)	7月 31日(金)
1389	7月 28日(火)	8月 25日(火)	8月 31日(月)
1390	8月 28日(金)	9月 17日(木)	9月 28日(月)
1391	10月 1日(木)	10月 23日(金)	10月 29日(木)
1392	10月 29日(木)	11月 20日(金)	11月 27日(金)
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月 25日(水)	12月 17日(木)	12月 24日(木)
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393

内線22031

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

学内広報にご寄稿の際は、
以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
21.5.31	横井 浩史	辞職（電気通信大学教授）	大学院工学系研究科准教授
21.5.31	加藤 久典	辞職（総括プロジェクト機構特任教授）	大学院農学生命科学研究科准教授
(採用)			
21.5.16	吉川 雅英	大学院医学系研究科教授	京都大学産学官連携教授
21.5.16	伊東 一文	大学院数理科学研究科教授	
21.6.1	岡林 潤	大学院理学系研究科附属スペクトル化学研究センター准教授	東京工業大学大学院理工学研究科助教
21.6.1	眞田 佳門	大学院理学系研究科附属遺伝子実験施設准教授	大阪大学大学院医学系研究科准教授
21.6.1	山本 清	大学院教育学研究科教授	国立大学財務・経営センター研究部教授
21.6.1	木立 尚孝	大学院新領域創成科学研究科准教授	
(昇任)			
21.5.16	小穴 英廣	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
21.5.16	佐野 光彦	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
(配置換)			
21.6.1	太田 順	人工物工学研究センター教授	大学院工学系研究科教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 Today Forum 2009 in the UK

NEWS

- 04 春の紫綬褒章受章

一般ニュース

- 05 高齢社会総合研究機構
高齢社会総合研究機構の設立、及び設立記念イベントの開催
- 05 本部学生支援グループ
「第61回一橋大学・東京大学対校競漕大会（東商戦）」開催される
- 06 生命科学ネットワーク
第6回「東京大学の生命科学」シンポジウム
- 07 海洋アライアンス
第4回イブニングセミナー開催
- 08 本部奨学厚生グループ
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成21年度4月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催
- 09 学生相談ネットワーク本部
第1回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

部局ニュース

- 09 大学院工学系研究科・工学部
総合研究機構量子科学研究センター主催“John L. Hall 先生 若手研究者との集い”フォーラムが開催される
- 10 大学院工学系研究科・工学部
高速中性子源炉“弥生”と電子ライナック施設が日本原子力学会歴史構築賞をダブル受賞
- 11 大学院教育学研究科・教育学部
春季東京都高校軟式野球大会において附属中等教育学校が6年ぶり6回目の優勝
- 11 医学部附属病院
合同就職説明会（六本木ヒルズ）で看護師募集活動を実施
- 11 史料編纂所
「日本関係清代档案をめぐる国際研究集会」が開催される
- 12 海洋研究所
ブトラマレーシア大学との学術交流に関する協定の締結

キャンパスニュース

- 12 本部学務グループ
平成21年5月1日現在学生数 一学部学生14,057人、大学院学生13,764人、研究生等753人

コラム

- 15 発掘！総長室総括委員会 第13回
- 16 Crossroad 産学連携本部だより vol.43
- 17 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.19
- 17 インタープリターズ・バイブル vol.23
- 18 コミュニケーションセンターだより No.58
- 18 Relay Column「ワタシのおシゴト」 第40回

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 19 ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 (CNBI)
CNBI 共催・富士フィルム寄付講座シンポジウム
生体認識分子の進化と深化：産学連携による工学的展開

募集

- 19 生産技術研究所
集まれ！ 発明王 第7回東京大学学生発明コンテスト

お知らせ

- 20 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第521(6月3日)号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—
- 21 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 22 本部学生支援グループ
東京大学音楽部管弦楽団 サマーコンサート2009のお知らせ
- 22 大学院総合文化研究科・教養学部
「小穴純とレンズの世界」展
- 22 海洋研究所
「一般公開：中野キャンパスより 感謝をこめて！」のお知らせ
- 23 大学院理学系研究科・理学部
第64回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 24 東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト (TSCP) 室
使い方の工夫でCO₂排出削減に相乗効果を！

巻末特別記事

- 25 第82回五月祭開催

事務連絡

- 26 人事異動(教員)

淡青評論

- 28 博士が活躍する社会

◆ 表紙写真 ◆

Today Forum 2009 in the UK
(2ページに関連記事)

編集後記

今月の特集は『Today Forum 2009 in the UK』。偶然にも、最近、私の隣席にユアンさんというイギリス人の方が着任しました。広報Gで制作している英文印刷物(英文概要、英文淡青など)のチェックをしてもらっています。この勢いで、今後は学内広報英語版も作ろうと思っています(もちろん冗談ですが)。東大職員も多様化しております。(し)



七徳堂鬼瓦

博士が活躍する社会

以前MITの恩師を訪ねた折、彼の研究室で、2人の博士課程学生が自分たちの研究している材料が医療用材料として製品化できないか、熱心に議論しているところに遭遇したことがある。そのためにハーバードの医学部の教授にも相談に行ったという。彼らにとって、博士課程の研究は学位取得のためだけでなく、将来のビジネスチャンスにも関わるものだったわけである。よく知られているように、米国の大学では就職するより自分で起業したいと思っている学生が多く、それが博士課程修了後の選択肢を大きく広げているように思われる。

また、企業に職を求める場合でも受け入れの間口は広い。就職の時期も個人ごとに様々である。「企業が博士を採用するのは、その専門性ゆえでなく、課題の発見や解決の能力ゆえである。」とは、先日私の所属する工学系研究科で催された「企業と博士」シンポジウムで米国IBMの副社長、T. C. Chen博士が述べられたことであるが、米国では博士に対して、専門性だけでなく企画やマネジメントでも通用する能力を期待し、それが企業での活躍の場を広げている。

工学系研究科では、博士の進学率低下に関連して前述のシンポジウムはじめ様々な活動や調査を行っているが、この問題を考える上では、学生自身の起業や産業界で活躍する意識、博士を採用する側の企業の意識も重要と思われる。博士課程が、後継者や専門性の高い人材の育成のためだけでなく、グローバルに活躍できる適応性に優れた人材を社会に輩出する上でも役割を果たし、より多くの学生がそれを志向するようになるには、博士課程の制度や就職の仕組みの改革、ベンチャーの支援などと同時に、学生やそれを受け入れる企業のマインドの変化も必要であろう。残念ながら、日本人学生からは「博士を取得して世界を相手に活躍したい」といった博士進学の志望動機をほとんど聞かない。欧米の学生を見ると、将来のキャリアイメージを持ちながらも卒業の時期などあまり気にせず、じっくり研究に取り組んでいるように見える。焦らずともその後には色々な可能性があり活躍の場があるという意識や環境の柔軟性ゆえかもしれない。我々も博士課程に対して様々な検討や改革を続ける一方で、そういった共通認識や環境を産学で醸成することが必要であり、それが学にも産にも、さらに科学技術立国としても大きなメリットにつながるように思われる。

小関敏彦（大学院工学系研究科・工学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1387 2009年6月19日
東京大学広報委員会

〒113-8654
 東京都文京区本郷7丁目3番1号
 東京大学本部広報グループ
 TEL：03-3811-3393
 e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>